

インターネット上での日系アメリカ人収容の集合的記憶

—日系人収容所「巡礼」のオンライン化を事例に—

Collective Memory of Japanese American Internment on the Internet:

A Case Study on the Digitization of "Pilgrimage" to Japanese American Internment Camps

稲葉 あや香*

Ayaka Inaba

1. 問題の所在

集団の過去を物語ることは、集団のアイデンティティ構築の重要な手段である。複数の国を跨ぐ移民の記憶は、ルーツの国と居住国という複数の国民国家にあって、いずれの国民の記憶からも周辺化される。よって、移民が自集団の集合的記憶を築く行為は、居住国の中で自らの正当な地位を要求する「帰属の政治」(Brubaker, 2010, p. 64) を伴う。とりわけ日系アメリカ人の記憶は、日米が戦った太平洋戦争の歴史ゆえに、その構造が際立っている。特に太平洋戦争中の日系アメリカ人強制収容⁽¹⁾の記憶は、日系アメリカ人を、合衆国への忠誠を重んじるアメリカ市民として強く枠づけてきた。

その一方で、人々が国境を越えて交流できるインターネットは、移民の記憶が孕む越境性を顕在化させる。さらに2020年のコロナ・パンデミックにより人々は対面での集会を禁じられ、インターネットでの集まりを余儀なくされた事が、上述の特性をさらに顕著にあぶり出す

と考えられる。以上から、問いが生まれる。このインターネットとコロナ・パンデミックを機に、国境を越えた日系人収容の記憶の場ができたとき、アメリカ市民としての日系アメリカ人の「公式な記憶」(Bodnar, 1992) は存続しうるのか。

本稿では、インターネットが集合的記憶に及ぼす影響をグローバルな文脈で明らかにするために、コロナ禍を受けて2020年に催行されたオンライン行事「ヴァーチャル巡礼」を事例として分析する。日系人収容所跡地で行われてきたメモレーション「巡礼」は、収容をアメリカ統合の歴史として表象するだけでなく、人種マイノリティ同士の連帯や、国家の物語にとって「危険」な抵抗者の記憶の表現の場にもなり、日系アメリカ人の集団としての関心の変化を如実に反映してきた(Takita, 2007)。本稿はこのような巡礼の特性に着目し、ヴァーチャル巡礼のテキスト分析を通して、巡礼で想起される日

* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：集合的記憶、公式な記憶、ヴァナキュラーな記憶、日系アメリカ人収容、ヴァーチャル巡礼

系アメリカ人の記憶が、とりわけパンデミックとオンライン化という 21 世紀初頭に起きた状況でいかに変化するかを考察する。そして、よ

り一般的にネット社会の中での移民の記憶について考える手がかりとしたい。

2. 日系人収容を巡る想起の複数性と記憶の場

Maurice Halbwachs (1925, 1950) は、個人が集団の観点から想起する過去のイメージを「集合的記憶」と呼び、場所や暦などの社会的枠組みを介して、人々の現在の関心から構成される動的なものだと捉えた。この集合的記憶は、立場の異なる集団が繰り返す「何が想起に値するのか」という争いの過程で常に構築され続けるもので (Sturken, 1997)、式典や記念碑などの「記憶の場」(Nora, 1989) はその折衝の舞台として研究されてきた。

そのような集合的記憶論の立場を継承した John Bodnar (1992) は、アメリカの祝賀行事を研究対象として、愛国主義が人々の想起に与える影響を明らかにするために、「公式な記憶 (official memory)」、「ヴァナキュラーな記憶 (vernacular memory)」、「パブリックな記憶 (public memory)」という 3 類型を提示した。まず Bodnar は、記念事業や記念碑などの形で具現化された歴史観を「パブリックな記憶」と呼び、人々の過去、現在、未来に対する解釈を形成するものと捉えた。さらにこのパブリックな記憶は、「公式な記憶」と「ヴァナキュラーな記憶」のせめぎ合いにより動的に構築されると仮定した。

1 つ目の「公式な記憶」とは、国への忠誠など市民としてのあるべき姿を示す理念であり、国家権力が国民統合のために作り出し、主にエ

リート層が広める。一方「ヴァナキュラーな記憶」は、エスニック集団や地域などのより小さな集団が、個々の利害関心や経験に基づいて立ち上げる記憶である (Bodnar, 1992, pp.13-15)。Bodnar はこの図式を使い、記念事業に現れる「パブリックな記憶」の中に両者の対立と均衡を観察しようとした。

Bodnar の図式を日系アメリカ人の記憶に当てはめると、次のように説明できる。Bodnar はヨーロッパ系移民の移住周年記念式典の分析を通して、在米の移民のパブリックな記憶は、アメリカへの愛国心を重視する公式な記憶と、先祖や祖国の功績に関心を持つヴァナキュラーな記憶のせめぎ合いから成ると考え、第二次世界大戦と冷戦を機に公式な記憶が前景化してきたと論じた (Bodnar, 1992)。日系アメリカ人収容を想起する式典もその例外ではなく、巡礼や想起の日といった式典では、日系人のアメリカへの忠節と貢献が強調され、祖先の国である日本への関心は後景に退いてきた。しかし Bodnar が事例としたヨーロッパ系移民と異なり、日系人は非白人として、アメリカ主流社会のメンバーシップからの排除を受けてきた集団である。そのような経緯から、日系アメリカ人のヴァナキュラーな記憶は、アジア系や非白人といった在米の人種マイノリティへと接近した。

その図式を形作った事件が、第二次世界大戦中の日系アメリカ人強制収容である。1942年、大統領令 9066 号により、太平洋沿岸地域の日本人とその子孫が強制的に住居を立ち退かされ収容された。戦後は多くの収容経験者が収容について沈黙する中、全米日系市民連盟 (JACL) が中心となり、収容に従った日系人や日系兵士の合衆国への「忠誠心」の深さを強調し⁽²⁾、政府の見解に沿った公式な日系アメリカ人の記憶を形成した。

しかし 1970 年代以降、公民権運動の影響を受けた日系人活動家の間で、収容を公民権の侵害だとして批判し、収容に対する補償を求めるリドレス運動が展開された。そして 1988 年に連邦政府は「市民の自由法」を定め、収容を人種的偏見に基づく過ちと認め、謝罪と補償を行った。重要なのは、同法に政府が収容の歴史保存に努めるべき旨が明記され、それに基づき収容の歴史伝承を行う個人と団体を対象とした「日系アメリカ人拘禁地 (JACS) 助成プログラム」が内務省国立公園局内に設置されたことである。これらの背景から、補償後には公的機関が日系アメリカ人の歴史保存に深く介入していった⁽³⁾。

しかし補償後、忠誠を重んじる公式な記憶は、収容を非白人アメリカ人への人種差別の歴史と見なすヴァナキュラーな記憶による批判を受ける。90 年代以降、巡礼や想起の日などの記念式典や、日系アメリカ人史を扱うミュージアムで、収容は国家への忠誠の物語に加え、アメリカを徹底する人種差別の歴史の一部として表象されていく⁽⁴⁾。そこで強調されたのは、日系人がアジア系あるいは有色人種として他の

有色人種コミュニティと連帯し、人種差別に抗することの重要性である。

それに伴い一部の公的機関も、アメリカの人種的多様性と反人種差別を強調するエスニック・マイノリティの記憶を、国が関与する記念行事に取り込んでいった。いわば、公式な記憶が支配的だったパブリックな式典において、公式な記憶とヴァナキュラーな記憶の折衷が起きたのである。そのようなダイナミクスがよく表れている式典が「巡礼」だ。巡礼は、収容所跡地を訪れそこで亡くなった者の慰霊と収容の歴史学習を行う行事だが、公民権運動の影響を受け、アメリカの人種問題へも強い関心を寄せてきた⁽⁵⁾。

1990 年代から、一部の収容所跡地が国定史跡等に認定されたことで、史跡の管轄行政機関である国立公園局が巡礼の企画に関与していく。しかし 2000 年代以降も、巡礼で現れるパブリックな記憶は、エスニック・マイノリティのヴァナキュラーな関心を表象してきた。たとえば 9.11 テロ後の 2002 年と 2005 年のマンザナー収容所巡礼では、日系アメリカ人と共にアラブ系アメリカ人団体メンバーがスピーチを行い、当時の反アラブ系感情の広がりや戦時中の日系人迫害の類似性を指摘し、人種迫害の歴史を繰り返さぬよう訴えた (manzanarcommittee, 2008a, 2008b)。このような主張は、アメリカで人種差別的事件が起きるたびに、日系団体や日系活動家の間で繰り返されてきた。

そのような日系アメリカ人の記憶の複数性を可視化したのが、1990 年代に普及したインターネットであった。インターネット上の日系人収容の記憶を分析した Ingrid Gessner は、スミソ

ニアンの企画展 A more perfect union 展のリアル版とオンライン版を比較し、リアル版では二世兵士の国家への貢献という公式な記憶が前面に出たのに対し、オンライン版では政府の負の歴史である収容経験が前面に展示されたと論じる。Gessner は、扱った事例の多くが連邦機関のウェブサイトだったこともあり、ウェブサイト上であっても政府の公式な記憶が優勢であると結論づけた。

しかし、リドレス運動史を研究した Alice Yang Murray は Gessner と逆の見解を示した。Murray は、リドレス活動家が収容への「抵抗者」の名誉回復を目指したウェブサイト JAvoice.com（現存せず）や Resisters.com (<https://resisters.com/>) を事例に、国家主導の記憶の場では不可視化された日系社会内部の軋轢が、1990年代のインターネット上で可視化されてきた事を示した (Murray, 2008)。また同時期の1995年に創設された日系アメリカ人収容のデジタルアーカイブ「デンショウ (Densho)」も、間エスニック的繋がりや日系人内部の対立に言及する (Densho, n.d.)。

さらに、Gessner と Murray の研究は収容をアメリカの歴史認識を巡る一国内問題と捉えてきたが、21世紀初頭にはアメリカ国内での公式な記憶とヴァナキュラーな記憶の対立という問題系に留まらない事例が現れる。ごく一部の例として、世界の日系アイデンティティを探索する全米日系人博物館のウェブサイト Discover Nikkei (<https://www.discovernikkei.org/en/>) や、Tessaku (<https://tessaku.com/>) のような収容を個人史や家族史として保存する個人ウェブサイトが出現している。

このように、ポスト補償期の日系アメリカ人のパブリックな記憶は、合衆国へ忠誠を誓う一つのアメリカ国民という公式な物語が相対化され、内部多様性や多人種性、さらにはトランスナショナル性を肯定する方向に発展している。そのような潮流の中、2020年代の日系アメリカ人の「パブリックな記憶」は、公式な文化とヴァナキュラーな文化からの影響をどのように受けるのだろうか。

この課題をあぶり出す現象として本稿が注目するのが、2020年に始まったコロナ・パンデミックと、それに伴う祈念式典のオンライン化である。加えてアメリカの国内情勢として重要なのは、2020年前半に人種差別的事件が相次ぎ、パンデミックが国内の制度的人種差別の問題を浮き彫りにしたことだ。そのような背景の中、一部の日系アメリカ人収容の記念式典がオンライン化された。2020年以降、各地の巡礼主催団体や JACL ら日系人団体が「ヴァーチャル巡礼」と名付けた行事を企画した⁽⁶⁾。これらの記念行事の大半は、主催団体が単独で企画し、コロナ前の式典をオンラインで再現したもののだが、2020年3月頃から、全国の収容所と歴史団体、博物館を巻き込んだ巨大な「ヴァーチャル巡礼」である「タダイマ！コミュニティ・ヴァーチャル巡礼」（以下、タダイマ）が企画され始めた。タダイマの主催団体である Japanese American Memorial Pilgrimages（以下、JAMP）は、映像製作者の日系人が2016年に立ち上げた非営利団体で、収容所巡礼の記録を目的としている。2018年からは国立公園局の JACS 助成金を受けてドキュメンタリー制作を進めてきたが、JAMP の関心はあくまで巡

礼に参加する日系人の家族の記憶にあった (Japanese American Memorial Pilgrimages, n.d.)。

JAMP 創始者の一人、Kimiko Marr は、当初は高齢の収容経験者がパンデミック中も巡礼に参加できるよう巡礼のオンライン化を提案したと語る (JAMP, 2020e, 17:40-18:10)。しかし結果的にタダイマは、JAMP の従来の活動とは異なる性格を有することとなった。その特徴として、公的性格と関与するアクターの多様さが挙げられる。タダイマは 2020 年 6 月 13 日から同 8 月 16 日までの 9 週間で、365 本の動画を公開する長期イベントとなり (JAMP, 2020a, 2020d)、国立公園局職員と JAMP とが共同理事を務め、個人歴史家や活動家に加え、著名人や日系議員までが協力した。

動員人数の大きさもタダイマの特徴である。2022 年 1 月 15 日時点で 2020 年公開のヴァーチャル巡礼を比較すると、2020 年 6 月 14 日にライブ配信された Tadaimal Opening Ceremony の視聴回数は 4,126 回であり、次点の 2020 Virtual Manzanar Pilgrimage (51st Annual) の 2,923 回を 1000 回以上引き離す (JAMP, 2020c; manzanarcommittee, 2020)。さらに累計視聴者数は 2020 年 8 月時点で約 10 万人と、同時期のヴァーチャル巡礼の中でも大規模であり (JAMP, 2020d)、社会に強い影響力を持つと考えられる。そのようなオンラインイベントとしての影響力の大きさと、関与するアクターの多様さ、その公的な性格から、本稿は「Tadaimal A Community Virtual Pilgrimage (以下、タダイマ)」を分析対象とする。そして、パンデミックとオンライン化という 21 世紀初頭に起きた

状況を受けて、愛国的アメリカ市民の公式な記憶と、エスニック・マイノリティとしてのヴァーナキュラーな記憶の 2 つがいかに影響を受けるかに着目する。

特にタダイマのコンテンツのうち、主催団体 JAMP 監修の動画を分析対象とする。1 つ目は 2021 年 6 月 13 日 (以下、公開日は太平洋標準時) に公開された「Tadaimal Opening Ceremony (以下、開会式)」(JAMP, 2020c)、2 つ目は同年 8 月 16 日公開の「Closing Ceremony (以下、閉会式)」(JAMP, 2020d) である。加えて補足資料として 2020 年 11 月 18 日に JAMP が開催したタダイマ企画の舞台裏を語るイベント「Community Engaged Digital Programming」(JAMP, 2020e) や、2021 年のタダイマ巡礼の資料を適宜分析対象とした。まず分析対象のテキストに内容に基づいたカテゴリーを付与し、テキスト全体をコーディングした。その後、「タダイマの意義」に言及したテキストを主に分析した。

本節の最後に本稿の手法の特長と限界を述べる。JAMP による動画をデータとする利点は、個々のコンテンツには表れづらいタダイマ全体のテーマが読み取れることだ。上で述べた開会式と閉会式は、多様な主体が手掛けたタダイマのコンテンツを総括する役割を持つ。ゆえにこの 2 つの動画が提示する巡礼像の分析は、公式、ヴァーナキュラー双方の立場を持つ多くの参加者の利害を折衷するために用いられたロジックを読み取る有効な手段である。その反面、これらの動画には主催者の声が強く現れるため、集合的記憶の解明に送り手と等しく重要な受け手の声が後景に退くという限界もある。そのような

特長と限界を踏まえながら、本稿は上述のデー

タに現れるタダイマの意義を分析していく。

3. 分析

3.1 反一人種差別の場としてのタダイマ

前節に記載した通り、タダイマの対象作品中で日系アメリカ人収容の記憶の意義と内容がどのように説明されたかを分析した。以下で結果を示し、考察を加えていく。

まずタダイマが開催された背景として、同イベントでは2020年上半期の2つの社会情勢—コロナ・パンデミックと人種差別的事件—に言及し、特に後者を日系人収容の繰り返しだと解釈する。つまり従来の記念行事同様、収容を在米エスニック・マイノリティ全体への人種差別の記憶として理解した。たとえば、開会式で総合司会者の David Ono は、日系コミュニティの今後の課題として、コロナ禍による人種差別や人種間格差の深刻化を挙げる。

彼ら〔筆者註：若い世代の日系人〕の多くにとって、人種差別との闘いは今までと変わらず重要です。COVID-19の感染拡大によってアジア系アメリカ人は急増する憎悪犯罪に直面している一方で、アメリカ先住民は最悪の感染率に直面しています。私たちの生活の多くの側面が停止していることを考えると、私たちはもはやアメリカの黒人の殺害を見て見ぬふりをすることはできません。(JAMP, 2020d, 26:51-27:12)

また、もう一人の総合司会者である Tamlyn Tomita は下のように述べる。

今までに、私たちは、あらゆる州と米国領土で、2ヶ月半にわたるブラック・ライブズ・マター・デモを伴う継続的な抗議行動を目撃してきました。これは、1960年代以来最大のアメリカの公民権運動かもしれません。私たちはコミュニティとして人種差別の影響を深く感じてきましたし、自分たちのために声を上げてくれるアライの重要性を身をもって知っています。今、私たちにも同じことをするチャンスがあります。私たちは日系アメリカ人史に焦点を当てて夏を過ごしましたが、私たちの歴史は他の多くの人々の歴史と緊密に絡み合っています。(JAMP, 2020d, 27:13-27:45)

この直後、日系アメリカ人収容とリドレス運動はアフリカ系アメリカ人の公民権運動の歴史と関連付けられ、日系アメリカ人は人種迫害の経験を持つ集団の責務として、非白人マイノリティのアライとなるように呼びかけられる。

しかし「公式な記憶」が否定されたわけではない。日系人俳優であり、アメリカ日系社会の著名なスポークス・パーソンである George Takei は、開会式で収容を「アメリカの物語」(JAMP, 2020c, 52:02-52:05) と呼び、さらに巡礼を民主主義や法の統治といったアメリカニズムの理念を取り戻すための行事と呼び表し

(JAMP, 2020c, 46:28-47:22)、巡礼の意義を公式な記憶の観点から説明した。しかし同時に Takei は、アジア系ヘイトクライムへ抗議の意を表し、日系性が「アメリカの集合的アイデンティティを豊かにする」要素であることも強調する (JAMP, 2020c, 52:06-52:15)。

このように 2020 年のタダイマにおいて、コロナ・パンデミックを機に、収容はまず人種マ

3.2 日系コミュニティ概念の拡張：収容経験という共同性

しかしタダイマは、巡礼におけるアメリカ国内の公式な記憶とヴァナキュラーな記憶の語りを踏襲しただけではない。主催者はオンライン化を好機ととらえ、伝統的な日系アメリカ人の歴史ナラティブの拡張を試みていた。タダイマの共同理事である JAMP の Kimiko Marr と国立公園局の Hanako Wakatsuki は、典型的な日系アメリカ人史の語りが真珠湾攻撃から始まることを指摘し (JAMP, 2020e, 39:24-39:54)、タダイマでは移民初期や、世界中の日系人収容の経験を含めた、より包括的な歴史を描きたかったと語った (JAMP, 2020e, 38:07-39:11)。その方針は、タダイマの構成にも反映されている。タダイマには第 1 週から第 9 週まで、週ごとに異なるテーマが定められているが、そのテーマは時間面では 19 世紀の一世の移住から現在までをカバーし、第 7 週ではアメリカ国外の日系人収容の歴史がテーマとなっている (JAMP, 2020a)。

そのように想起の時間的・空間的スパンを拡張した結果、タダイマにおけるパブリックな記憶に含まれたのが、グローバルな日系人収容の歴史である。ではタダイマは、アメリカの一国

イノリティの被差別経験というヴァナキュラーな記憶として表象された。しかし同時に、その語りは収容をアメリカニズム賞賛の物語とする公式な記憶と絡み合う。つまりタダイマが提示する日系アメリカ人の記憶は、ネイションの記憶とエスニック・マイノリティの記憶の混淆物である点で、従来の巡礼の語りを踏襲する。

史として理解されてきた収容に、世界の日系人をいかにして取り込んだのか。開会式での司会者挨拶からは、世界の日系人収容が、アメリカ国内の日系人収容への理解を深める手段として解釈されていることが分かる。Ono は、第二次大戦中の日系カナダ人と日系オーストラリア人の強制収容やラテンアメリカ諸国の日系人のアメリカへの強制連行の歴史を引き合いに出し、「合衆国の収容施設のシステム」の広大さや複雑さを訴えた (JAMP, 2020c, 26:47-27:19)。公開されたコンテンツを見ても、第 7 週「国外の日系人収容」をテーマに公開された動画 38 本中 20 本がアメリカ国外の日系人に関するもので、その内 15 本が戦時中に世界の日系人が受けた迫害を主要なテーマとした (JAMP, 2020b)。ここで日系人のエスニシティではなく、立ち退きと収容という共通経験に焦点が当たっていることは注目に値する。

さらにタダイマにおける「グローバル日系コミュニティ」は、国を超えて自身の経験を共有する集団として示される。閉会式では、「なぜタダイマはあなたにとって重要だったのか」というテーマでコンテンツ寄稿者 10 名へのイン

タビューが紹介されたが、うち6名が、他国の日系文化や収容を学ぶことができた点を意義として挙げている (JAMP, 2020d, 10:21-15:12)。さらに冒頭の司会者挨拶では、タダイマが世界各国から視聴者を獲得した事が紹介されたのち、Onoより「私たちがどこにしようと、すべての日系人 (all Nikkei) が自分の物語を語ろうと思ってくださることを願っています」との発言があった (JAMP, 2020d, 9:39-9:43)。

ここからタダイマは、日系アメリカ人と世界の日系人とを、人種差別の経験を共有し語り合うコミュニティとして描き出そうとしていることがわかる。これは、人種差別の記憶を共通項に日系アメリカ人と非日系・非白人アメリカ人の共同性を想起する従来のヴァナキュラーな記憶と共通のロジックである。このロジックによりタダイマは、日系アメリカ人、在米の非日系・非白人マイノリティと、アメリカ国外の日系人という、国籍とエスニシティを超え、人種差別の経験としての日系人収容を共有し学びあう想起のコミュニティへと包摂したといえる。

3.3 多様な日系人の「ホーム」としてのタダイマ巡礼

タダイマの想定視聴者である「日系」コミュニティの多様化に関連して、モデレーターたちが、巡礼名「タダイマ (I'm home)」やその名に含まれる「ホーム (home)」概念が視聴者にとって重要であると、繰り返し強調したことに触れねばならないだろう。このホームはきわめて多義的な概念だが、ここでは単に当事者概念として、タダイマ内での用法に従い解釈を進めていく。過去の巡礼において、ホームは文字通り日系アメリカ人の収容前の住居を指す語で

もう一つ、タダイマで強調されたのが、日系アメリカ人の歴史と他のコミュニティの歴史との交差性だ。それは収容経験を軸とした多人種間の連帯と、日系人内部の多様性の2つを意味する。将来の日系人へ向けたスピーチでTomitaは、日系社会内部のアイデンティティの多様性を意識すべきと指摘し、多文化化した日系の若者が「他者のために声を上げるという素晴らしい日系の遺産」や「コミュニティとして私たち全員にとってとても意味のある場所や物語を守り続けてくれる」ことへの期待を述べる (JAMP, 2020d, 37:18-38:05)。

ここで、収容を語り継ぐ「日系」コミュニティは単なる人種的コミュニティを超え、差別に晒されるマイノリティのために声を上げるというアドボカシー精神により繋がるコミュニティとして再定位される。このような日系コミュニティ像は、前述した日系アメリカ人、非日系・非白人アメリカ人、世界の日系人を皆包摂するカテゴリーともいえる。

あった (Manzanar Committee, 2019)。それがタダイマ巡礼でキータームに選ばれた背景には、視聴者が置かれるステイホーム状況があったという (JAMP, 2020d, 36:50-38:05)。つまりパンデミックにより「人びとが突然『ステイホーム』を求められたことにより、期せずして「ホーム」という空間／場所に関心が集まった」(倉光, 2021, p. 67) 結果といえる。

しかしタダイマでは、「ホーム」という語は単なる住居を超えた意味で用いられている。そ

れは視聴者に心理的な安心感（福田，2008，p. 10）を与え、かつ「ルーツに戻りたいという彼ら（筆者註：日系アメリカ人）の欲望を表す」ものとして使われていた（Yamato，2020，para. 4）。特に以下で述べる Tomita、Williams、Ikeda、Takei の言う「ホーム」は、それを如実に示す。

例えば Tomita は、「私たちが助けを得られ最も心地よく感じる場所はどこであろうとホーム」（JAMP，2020c，28:37-28:44）と述べている。これは前後で COVID-19 と人種差別への不安に言及した上での発言であり、心理的安心感を得る場としてのホームを示す。

さらにホームはルーツの場をも意味して用いられる。現地巡礼の恒例行事である慰霊と祈祷では、大学教授でもある僧侶 Duncan Ryuken Williams が、ホームとは「人種や宗教を理由に排除された」エスニック・マイノリティとしての帰属感だと示唆する。Williams は、巡礼を「帰属感（a sense of belonging）とホームの感覚（a sense of home）を取り戻す方法」であり、「人種や宗教を理由に排除された者を思い出し、そして帰属感を取り戻すために必要な連帯を思い出すための旅」と呼ぶ（JAMP，2020c，33:10-33:40）。他方で Kurt Ikeda は「タダイマ（I'm, home）」という語を、祖父母の過去、つまり祖先のルーツを知るという意味で用いる（JAMP，2020c，43:30,43:50）。Takei は戦前の日本町を「ホーム」と呼び、そこが「日本的でありアメリカ的である」、「私達らしい場所」であること、つまり日系というエスニックなルーツに注目している。（JAMP，2020d，22:58-23:22）。

ここで整理しよう。タダイマ巡礼は「ホーム」

という場に集うことである。ただし「ホーム」は地理的実体ではなく、心理的安心を得ることができ、かつ人種的・家族的ルーツに近づくことのできる仮想的な場所といえる。しかしこれだけでは、ルーツやアイデンティティ等と言えば表せることを、なぜ「ホーム」と迂遠な表現をするのか、十分に説明できない。そこで、翌年 2021 年のタダイマ巡礼の開会式で、司会の Ono がより詳細な説明をしている箇所を引用する。

「Tadaima!」は日本語で「I'm home!」を意味します。「タダイマ!」はまた、ホームとは、どこであれ私たちが最も居心地よく感じる場所であり、私たちが支えられ、尊敬され、愛される場所であるということをおぼえさせる言葉でもあります。私達のホームは、コミュニティとして、これらの物語との繋がりにかかわらず、これらの歴史を理解しようとし、進んで聴こうとする者なら誰にでも開かれています。（JAMP，2021，10:32-11:07）

この引用箇所の直後で、タダイマはコロナ禍があぶり出したマイノリティへの差別と格差への問題意識から行われていることや、他のエスニック集団と日系アメリカ人の歴史との交差性、エスニック・コミュニティ同士の連帯の必要性が訴えられる。ここでも、タダイマの視聴者である日系コミュニティが、収容の歴史の学習とアドボカシーを共通項とする共同体としてイメージされている。以上から総合すると、タダイマという「ホーム」は、日系か非日系か、

アメリカ人かそれ以外かを問わず、収容を人権侵害の歴史として学ぶアドボカシーの共同体が集うための仮想的な場と解釈できる。

このホームの解釈は、アメリカの「公式な記憶」を了解しない国外の者でも、日系人収容の歴史からアドボカシーの伝統を学ぶものならば、誰でも理解しうるものだ。さらに「ホーム」の語には特定の国家色や民族色もなく、それらを打ち消しもしない。よって収容者を家族に持つ日系人が家族的ルーツを知るという意味でも、日系アメリカ人／非白人アメリカ人が自分

の民族的ルーツを知るという意味でも解釈可能だ。つまり「ホーム」は「収容経験」をハブとしながら、多層な属性と経験を持つ日系アメリカ人、非日系アメリカ人、世界の日系人が共感できる巡礼の意味として用いられているといえよう。その「ホーム」に集うというレトリックにより、タダイマは、日系アメリカ人、非日系の非白人アメリカ人、海外の日系人の三者を、人種を理由とした人権侵害の記憶を共有し、人種差別に抗する、超国家的なアドボカシーの共同体として定位するのである。

4. 結論

最後に分析結果から本論文の結論を導き、今後の課題と展望を述べる。まずタダイマでは、従来の巡礼で語られてきた民主主義の理念やアメリカ人性を強調する公式な記憶と、反-人種差別を訴える人種マイノリティの立場からのヴァナキュラーな記憶が継承された。さらにオンライン化の影響を受け、グローバルな日系コミュニティという新たな集団の言説が加わった。これによりタダイマは日系アメリカ人、非日系アメリカ人、アメリカ国外の日系人という3つの集団を視聴者として想定することになった。

それに伴いタダイマは、視聴者を単一のエスニック集団や国民としてではなく、人種を理由に人権侵害を受けたという共通経験を持つグローバルな集団として定位した。これによりタダイマは、日系アメリカ人、アメリカ国内の非日系エスニック・マイノリティ、世界の日系コミュニティという、属性の異なる3種類のコ

ミュニティを、共通の経験を媒介とする超国家的な想起のコミュニティへとまとめ上げた。

その多様な視聴者をまとめるために使われた概念が、当事者概念としての「ホーム」であった。このホームは、収容の歴史を学びアドボカシーの伝統を引き受けようとする者なら、国籍やエスニシティを問わず誰もが参加することのできる場として構想された。言い換えればホームとは、国籍、エスニシティ、収容経験の有無において多様なタダイマの視聴者に巡礼の意義を理解させるための、国家色や民族色を排したラベルだといえよう。

ここまでの考察をまとめてみよう。全米で力を持つ諸団体が関与する日系アメリカ人史想起のイベントとして、タダイマは公式な記憶と在米エスニック・マイノリティのヴァナキュラーな記憶を概ね維持してきた。しかしイベント自体の公的な性格にもかかわらず、パンデミックとオンライン化は、アメリカ市民の立場からの

「公式な記憶」でも、在米エスニック・マイノリティの間で培われてきた「ヴァナキュラーな記憶」でもない、超国家的な人権侵害の経験の共有という記憶のナラティブを作り出していた。この過程は、巡礼に参加する日系コミュニティと、人種や国籍を超えた、人種差別というグローバルな経験を共通項とする記憶の共同体が、オンライン上に同時に浮上してくる過程と表裏をなしていた。

最後に今後の課題を述べる。本稿で、日系アメリカ人収容がトランスナショナルな人権侵害の経験として想起されたことを示した。今後の研究では、そのような新たな集会的記憶にどのような集団が包摂され、あるいは排除されていくのかというメンバーシップへの目配りが必要

である。また日系人をグローバルな集団として定義することにより、日系人収容が世界の戦時中の収容経験や、戦前の日本帝国によるディアスポラ政治の論理へと接続される可能性もあり、この視点での比較検討も有益であろう。また今回はタダイマの意義に関する言説に着目するために主催者側のテキスト資料を対象としたが、今後はオンライン動画のコメント欄やチャット記録などの機能を利用して、受け手による想起の分析を深めていくことが今後の課題となる。さらに今後は他の日系アメリカ人史関連のオンラインイベントや他の形態のメディアへと分析を広め、本稿の知見がどの程度一般化できるのか、検討を進めていきたい。

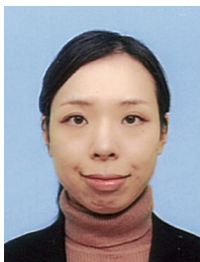
註

- (1) 戦時中の公的文書では日系人収容は「立ち退き (evacuation)」または「転住 (relocation)」、収容所は「転住センター (relocation center)」と記載されたが、現在の日系アメリカ社会でこの語は収容の不当性を隠蔽する語として忌避され、代わりに「(強制)収容 (internment, incarceration)」と「収容所 (camp)」という呼称が一般的に用いられる。本稿では日系アメリカ人社会の慣例に従い収容 (internment, incarceration) および収容所 (camp) の呼称を用いる。
- (2) 愛国主義とアメリカニズムの影響を強く受けた日系アメリカ人像の典型例として、1950年にJACLの指導者の一人マイク・マサオカが記したJapanese American Creedを参照されたい (The Japanese American Citizens League, 1950)。
- (3) 1990年代には、アメリカ国史として日系アメリカ人史を表象する事業が相次いだ。1987年に、米スミソニアン米国立アメリカ歴史博物館の憲法制定200周年記念企画として、日系アメリカ人をテーマとした初の企画展 A More Perfect Union が開催された。1992年にはマンザナー収容所が国定史跡に認定され、2000年にはワシントン D.C. に戦中の日系アメリカ人の愛国心を讃える全米初の記念碑が建造された。
- (4) たとえば、ロサンジェルス全米日系人博物館の企画展 America's Concentration Camps は、日系人収容をアメリカの黒人奴隷制や先住民強制移住の歴史と対比する展示を行い、収容をアメリカの人種差別の歴史に位置づけようと試みた (Murray, 2008)。
- (5) 1969年の第1回マンザナー収容所巡礼の目的の一つは、反米的な活動をした者の拘禁を認める国内治安法第2項の廃止だった。当時のアメリカ社会で、同法同項が共産主義者や黒人ナショナリスト拘禁の法的根拠になると危惧されていた事がその背景にある (Japanese American Citizens League, 1970, p.1)。
- (6) 2020年に開催された主なオンライン巡礼には、2020年4月25日 (以下、米国太平洋標準時) の Japanese American Citizens League San Jose Chapter (2020) による Virtual Pilgrimage to Manzanar、同日の Manzanar Committee による Virtual Manzanar Pilgrimage (manzanarcommittee, 2020)、同年10月3日公開の Poston Community Alliance (2020) の Poston Virtual Pilgrimage などがある。

参考文献

- Bodnar, J. (1992) . *Remaking America: Public memory, commemoration, and patriotism in the twentieth century*. New Jersey: Princeton University Press.
- Brubaker, R. (2010) . Migration, membership, and the modern nation-state: Internal and external dimensions of the politics of belonging. *Journal of Interdisciplinary History*, 41 (1) , 61-78.
- Densho. (n.d.) . *Why Does this Matter Now?*, Densho. Retrieved January 15, 2022, from <https://densho.org/learn/introduction/why-does-this-matter-now/>
- 福田 珠己 (2008). 「ホーム」の地理学をめぐる最近の展開とその可能性—文化地理学の視点から—. *人文地理*, 60 (5), 403-422.
- Gessner, I. (2007) . *From sites of memory to cybersights: (Re) framing Japanese American experiences*. Heidelberg: Universitätsverlag Winter.
- Halbwachs, M. (1925) . *Les cadres sociaux de la mémoire*. Paris : Presses universitaires de France. (アルヴァックス, M. 鈴木 智之 (訳) (2018). 記憶の社会的枠組み. 青弓社)
- . (1950). *La mémoire collective*. Paris : Presses universitaires de France. (アルヴァックス, M. 小関 藤一郎 (訳) (1989). 集合的記憶. 行路社)
- Japanese American Citizens League. (1970, January 2-9) . *Pacific Citizen*, 70 (1) .
- Japanese American Citizens League San Jose Chapter. (2020, April 26) . *Presentations from the 2020 Virtual Pilgrimage to Manzanar*. Japanese American Citizens League San Jose Chapter Website. <https://sanjoseacl.org/blog/2020-virtual-pilgrimage-to-manzanar>
- Japanese American Memorial Pilgrimages. (n.d.) . *About: JAMP*. Japanese American Memorial Pilgrimages. Retrieved January 19, 2022, from <https://www.jampilgrimages.com/about-jamp>
- . (2020a) . *Tadaima 2020*. Japanese American Memorial Pilgrimages. Retrieved October 6, 2021, from <https://www.jampilgrimages.com/tadaima2020>
- . (2020b) . *Week 7: Nikkei incarceration abroad*. Japanese American Memorial Pilgrimages. Retrieved January 19, 2022, from <https://www.jampilgrimages.com/week-7>
- . (2020c, June 14) . *Tadaima! Opening ceremony [Video]*. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=nTunG6v4aLc&list=PLymHxJdGKJOA6CLCsjm4-YvGeM-IhYuF9&index=138>
- . (2020d, August 17) . *Closing ceremony [Video]*. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=zAE9Oc3iCr0&list=PLymHxJdGKJOA6CLCsjm4-YvGeM-IhYuF9&index=46>
- . (2020e, November 19) . *Community engaged digital programming [Video]*. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=mMqIzKgg6Ec>
- . (2021, August 29) . *Tadaima 2021 opening ceremony [Video]*. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=hMFJV5A4130>
- 倉光 ミナ子 (2021). COVID-19 と「ホーム」—フェミニスト地理学の視点から—. *ジェンダー研究 : お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報*, 24, 67-74.
- manzanarcommittee. (2008a, June 3) . *36th Annual Manzanar Pilgrimage (2005) - Part 6 [Video]*. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=Qa2vhsXpO00&list=PL77E6E328F5077D3D&index=6>
- . (2008b, June 9) . *33rd Annual Manzanar Pilgrimage (2002) - Part 2 [Video]*. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=q5R9W9U79MU&list=PLB196F91DFA4FA647&index=2>
- . (2020, April 26) . *Virtual Manzanar Pilgrimage (51st annual) [Video]*. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=RU5Y0J0MC7s>
- Manzanar Committee. (2019) . *50th annual Manzanar Pilgrimage April 27, 2019: An enduring legacy for civil rights*.
- Murray, A. Y. (2008) . *Historical memories of the Japanese American internment and the struggle for redress*. California: Stanford University Press.
- Nora, P. (1989) . Between memory and history: Les lieux de mémoire. *representations*, 26, 7-24.
- Poston Community Alliance. (2020, October 3) . *October 3_2020 Poston Virtual Pilgrimage [Video]*. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=8SyByuVMj2o>

- Sturken, M. (1997) . *Tangled memories: The Vietnam war, the AIDS epidemic, and the politics of remembering*. Los Angeles: University of California Press.
- Takita, S. (2007) . *The Tule Lake pilgrimage and Japanese American internment: Collective memory, solidarity, and division in an ethnic community*. Ph.D. dissertation, UCLA.
- The Japanese American Citizens League. (1950) . *Japanese American creed, from booklet 'For better Americans in a greater America'*. Densho Encyclopedia. Retrieved January 19, 2022, from <https://encyclopedia.densho.org/sources/en-ddr-densho-274-20-1/>
- Yamato, S. (2020, August 13) . Through the fire: Making pilgrimages go virtual. *The Rafu Shimpo*. <https://rafu.com/2020/08/through-the-fire-making-pilgrimages-go-virtual/>



稲葉 あや香 (いなば・あやか)

[専門] 社会学、人の移動とメディア

[主たる著書・論文]

稲葉あや香, 2022, 「『不正義の景観』 デジタルアーカイブにおける日系カナダ人家族の記憶」『デジタルアーカイブ学会誌』 6 (2): e11-e15.

[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程 (投稿時)

[所属学会] 日本メディア学会、日本社会学会、デジタルアーカイブ学会、日本移民学会、日本アメリカ史学会

Collective Memory of Japanese American Internment on the Internet: A Case Study on the Digitization of “Pilgrimage” to Japanese American Internment Camps

Ayaka Inaba*

Postwar Japanese American collective memories have been constructed by two kinds of memories. One memory is “official memory” that emphasizes Japanese Americans’ patriotism and loyalty to the United States, and the other is “non-white vernacular memory”, an anti-racist narrative that locates their experiences into the broader non-white American history.

The internet has the potential to evoke transnational aspects of Japanese American memory, which complicates this binary. To analyze this phenomenon, this paper explores an online event, “Tadaima! A Community Virtual Pilgrimage” in 2020, to elucidate the impact of the use of the internet and COVID-19 pandemic on Japanese American domestic “official” memory.

This paper reveals the following points. Tadaima referred to the racism incidents and the BLM protest in 2020 America as challenges that Tadaima 2020 should tackle. Moderators also explained the Tadaima 2020’ significance in the light of both “official memory” and “non-white vernacular memory” . The former celebrates Japanese Americans’ Americanness and the ideal of democracy, while the latter emphasizes the importance of eliminating racism or helping other minorities in America who are targeted by violence due to their race.

Furthermore, Tadaima 2020 took this digital opportunity to discuss a global Nikkei community that shares the WWII internment experience. It reinterpreted Japanese American incarceration as global memory of human rights violation due to race, which is common with Tadaima’s three types of audiences: Japanese Americans, non-Japanese non-white Americans, and Nikkei population outside America.

Third, Tadaima’s moderators explained that Tadaima’s mission is serving the audiences as their “home”; a space where all three types of audience, regardless of their ethnicities or nationalities, can share and learn incarceration history and solidify to tackle with racism.

* Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

Key Words : Collective Memory, Official Memory, Vernacular Memory, Japanese American Internment, Virtual Pilgrimage.

These results suggest that *Tadama 2020* retained American “official memory” and “non-white vernacular memory”, but partly abandoned them by reaching a global audience amidst the COVID-19 pandemic. Instead, it defined Japanese American incarceration as a global memory of human rights violation and the “Nikkei” community as a multi-ethnic and multi-national community that has a shared experience and advocacy in common.